橘姫傳 曙草紙

二卷

13
3098
3

特
門へ13
3098
3

昭和九年
七月二四日
購求

櫻姫人生侍曙草紙巻之三

江戸　山東京傳補綴

大吉

第九

唖蝦蟇小蛇會両士

弥陀二郎が去れ建久元年より今歳承元元年まで十八年の間日本六十余州を回国して霊場宝地いくらある所もあまねく巡礼の郷に寓居して諸人を勧化し　このごろは陸奥なわしろの一旦古郷に入て都ののりさまをもうけんやと頻に思ひて飯路のぞく相州足柄を越竹の下道を辿れば時雨に時雨そぼ降れば傍の辻堂に入りて雨やどりとそのあとより行箒を負ふる雲水の僧おなじく辻堂に入りて　やとりしに二郎が携へる錫杖と鉦をつるしてえもいはぬ顔して　ものの持る鉦の裏に常照と文字へるさまやいかにぞ二郎いろはもちろん答ふ

旅僧再ひん身其二つの物ハいづくに持ゐるや必定いとまあらんと云
二郎此僧をよくくとふる前の年額ふ火印しる僧ふらく似るとハ
大ふめゆゝしき業いひけん此二品ゆうれくハ難有そうさ物語ゆかうらく
きうせゆんとくおのゝ元来悪性なり支を始うらく淀の一口あて頭陀
の沙門の額ふ火印しるぶ栗生野光明寺の釈迦佛の額ふ火瘡乃
痕あり〻と佛の告ふより淀の神の本ふく霊佛を感得し悪二郎とゆふ
名を更く弥陀二郎と叶るゆゝまと同国修行ふ出るまぐ細ゐ語る
法坊の容貌其時の沙門ふよく似るとくいぶりゆまこび旅僧ゆとうり
果しゆゝ御告ふるぶ我方ゐ又いとくたゆゝ物語ゆり空
ゆへて語くゆゝ御愚僧ハ黒谷上人の徒弟ふく専修念佛の行者
あり去れ建久の頃ハ山城国ふあり毎日淀の辺を勧化しゆぐ一夜の夢ふ

容貌端麗の一僧枕ぐふたらくのゝまゆゝ汝此後淀の辺ふゆくとゆん
若ゆゝ必必失わゝん汝ぐ鉦と錫杖を我ふ得させよ我一人の悪漢を濟度
ゆべゝとゆ用ゐ不ありとのゝゆふとかゆえく夢醒ゆぐ傍ふゆゝとゆる二品
已ふ失さり愚僧ぐ法号汝常照とゆふゆるふ鉦の裏ふ其文字を鑄つけ
おきゆ今ゆん身の携ゆれ二品ハ我所持の物ふまぐれる一其後淀の辺ふ
ゆるぐ打るゝくハ夢中の聖僧ハ光明寺の釈迦佛あく愚僧ぐ所持の
二品をとうゆひ我姿ふ現しゆん身を濟度しゆひう無勿体やとふゆゝそ
感涙をゆぐかゆるくいひゆゝ其後我阿弥陀の真身を絵とべゝと発願し
八幡の神宮ふ祈く志念捧ざゆぐ一時太神告玉ふく阿弥陀仏の真身ゆ拝
と思ぐ淀い弥陀二郎とゆる者ふ會べゝかゆ真身の弥陀をゆうをまゆと
のゝゆゝふ山州名跡志に同説ゆゝとふうらくゆん身の在所を尋ゆふ国修行ふ出るゝ

久〻く古郷ふ飯らめよ〻ふ世く我常ふ宿願をとげざる恐ひ居さ
ふ今日とう〻ど出會のうまて〻さよふ今語らまて水中出現の御佛い
真身の弥陀仏ふ凝ひ〻て〻く〻拝〻め玉ひとひけるバ二郎も寄身
のおりひ恐はさ〻ハ光明寺の尊像上人ふうら玉ひ〻我を渡せ恐ひ
しぶめうぐ〻やかぐ〻ひけるや其霊佛ハ則こゑ〻〻〻〻笑をえ〻さく
拝せられバ常照阿闍梨殊勝の思心骨ふ徹し感涙雨をふ〻ふうら
さ〻二郎いひけるハ小子かゆ〻〻一宇の仏堂を建立し此御仏を安置
まれべき大願めうゆるふ年久〻〻諸國をめぐり諸人を勧化し施
中ゆまバ其布施物を身ふあぶ〻ことめさらど其めうより粟生野の
光明寺ふつ〻へ〻おさ〻〻已ふ〻ばらめひ〻ることいくもいまど閑山と
ゑべ有徳の人を得ぞおうひ上人ハ此御仏ふ因縁深うれぐこひれ

ふりふ力をそへ玉ひ〻開基の主とうゆ可ゑ小子かゆ〻〻剃髪染衣
の望とめうとのぐも主君の為一功をそ〻〻旧悪の罪を償ひ〻後ふあ〻ざれバ
姿をかへぐ〻れ子細めう凡俗の身ふ〻かれ霊仏をとうをまんとゆとれめとバ
志をこぐうまぐ〻上人ふめづけうとべ〻とのひうれバ常照阿闍梨ハ悪を
去う〻善ふ飯〻う志念の誠を守そ〻尋常の人ふ〻ぐと感嘆し佛堂
建立の事ハ愚僧も力を尽くとべ〻とく御仏をうけうてゆのまが笑ふ
をさめ光明寺ふ〻再會をべ〻と守ふ約〻ゆ〻雨や〻〻れバ阿闍梨ハ
別ふ告〻出去り二郎ゆ〻〻〻ふ〻ふ〻ふ〻立る折も野寺の鐘入相を
告〻日もくれるんとそれべ寧此堂ふ一宿をべ〻とおりひ鉦打ましし念佛
まうし〻居〻るふ忽一陳の冷風さと吹〻木の葉をちらし三郎ゆ又〻ハ
冷こゆるとおゆ〻〻〻何方ともな〻一條の蛇いで来り石の地蔵の背後ふ

弥陀二郎
辻堂ふ時雨と避て常照めしかり
阿闍梨ふ遇小蛇尾長蝦蟇と
唖く両士ハ
會せ〜む

入て中ゞ〜畳紙の様なる物を咥へふゝびのごきさう紙をそひ破り裏ら
蝦蟇の干かゞびるを知〜くるくるんどる様子なり二郎怪し蛇を追ち
かの蝦蟇をとらゝえるふ長た尾ある蝦蟇ふゝ尋常の物ふあゝねば
まゝとゝあゝ〜石仏のうしろをうかゞひえるふ若た旅侍熟睡の体なり
二郎錫杖をこゝろ〜床の板ゑつたるをしけまば彼侍眠ゝ仏醒し叫し伸
つて二郎ゑえ中ゝ汝何等の奴なるとゞ我れなるゝゞ修行者ふ
打拾ゝ盗まる奴なるめいぐ拳をふべゝとゝ打うゝけまば二郎其腕
をとゝとゝ〜汝こそ賊なるとこれをえよ今一つの小蛇出来りて此物を咥
ゝ〜るゝ汝ら懐中ふ疑ひ世ふ希なる此尾長蝦蟇を持かゝ〜ら傳へ変
蝦蟇つゝひの賊ふまゞれば捕へゝ仏明をゞゝ変めりゝくい目ゑゝけよゝて
腕をゝ〜て捻倒とせゝゞ此侍もゝゞ着なるめとえゝ〜ゝゝもせゞゞ

一脚をゝ〜ゝ二郎を蹋倒ゝゝ二郎素早業の達人なるゞゞひゝゝとゝ身を
閃ゝ背後ゝり組つゝを彼侍総身の力を肱ふあつめ呀と一声呀ゝ肱
ゝ〜ふあゝとゝれば二郎堪ゞゝ〜手をゝ緩めかゝくゝあゝひゝ組つゝあゝひ
ゝぐゝれつゝめゝゝひゝゝゝ〜ふ髪ゝゝつゝゝゝゝあゝひ汗水ふあゝて捻合め時ふ山
の端を上れ夕月夜の光ふ来ゞゞ彼侍二郎ゞ顔をつゝとゝゝ〜ゝ〜權
まゝゝれよゝん才ハ真野の水二郎殿ゝくいゝゝゝとゝふ二郎原の名を
呀ゝゝ〜いゝぶゝゝゝゝゝゝ手をゝゝ緩めゝれば彼侍かゝゝ〜云小人了角の時ゝれば
只忘ゝゝひゝゝん篠村八郎公連ゞ子次郎公光ゝゝゝとふ二郎驚ゝゝ
べゝゝゝえゝおゞえゝ所残ゝゝゝゝ互ふおゝりひゞけざる出會を恐ぶゝ限り臣
公光いゝゝゝゝん才いゝゝゝ此蝦蟇のいゝれを知ゝふゝ二郎いゝゝゝ小子今ふ
到ゝ先非を悔主君の為一功を立ゝ回悪を償とおゝりひゝ折ゝゝ前年主君の

愛妾玉琴を蝦蟇つかひの賊奪ひ去りしと聞彼者ハ原白拍子にてありし時小人兒知りたる女なるゆゑ諸国修行のつゐでかの賊徒を尋玉琴の生死を糺明して一切にせんと心急しが今蝦蟇を見つけて御身なりとハ夢にもしらずかの賊徒ならんとおもひて無礼の事におよびつ御身ハ又何の為に此物を持給ふぞといふ公光これに又長々しき物語ありとて玉琴が奪はれし父八郎公連自殺しけること主君の仁心あつくいつくしみ給ひてさまよふ玉琴の行方をさがさんため十七年が間諸州各府に寓居し憂年月をおくりし事を物語けれバ弥陀二郎もはじめて其仔細を知りのちも又霊仏感得のことなどこまごまと物語夜もすがら互の艱難を語りあひて夜をあかしつひに再會を約して別去りけり

第十　櫻姫慕二宗雄一臥レ病

さても櫻ひめハ三木之助伴宗雄を見そめしより國に歸ても忘るゝ事一向かなひがたけれども何方の人いかなる者と其姓名だにも知ざ物やおもふと人もなく語慰むかたもなけれバしのび〳〵てつひに病となりつゝやくものもくはず面瘦身おとろへけれバ漢の李夫人照陽殿の病床に臥たりしも角やとぞ人申しけれバ善治夫婦大に驚き名医をもとめ良薬を与へ種々療養をくはふるといへどもさらに験なく野分の方ハ子を憐む世の人に越て厚く強悪の志にハ露たりも似ざれバ姫の病を深く悲み終日終夜枕方にそひ心を尽しつゝ看病けるが其かひもあらざれバ聰明伶俐の胸も子故の闇にくるゝ大膽不敵の志も子をおもふ情に弱きを高僧修験の加持祈祷ハ更なり堀川の盲入道の占照日の神子の梓にまで問ど其病根ぞさだかならずいかなる故とも見えざりけりかくて其

櫻姫伴宗雄ハ
病ミ臥義台夫婦ハ
愁名医ハ
良薬ハ用或ハ加持祈禱
或ハト筮掉の法さまゞ
心ハ尽ことゝ
快験なし

年もくれ承元二年の春ふるり櫻ひめの病をそこくこころよくなるふ
ゆりひなりもとの双親の喜びなのめなるを保養の為宮脇村の下館ふ移
し侍女女童めまさそへ〳〵歌合繪合糸竹のもてあそびふ心ゆ慰せけるが
頃も三月の天ふ〳〵百花めぐりそひ開き鳥雀巣ゆいとなみ佳氣人公を
催を時いとり庭上の櫻今ゆ盛なれど姫ハ日ろ好る花をうるさそう心憂
ゆうく去年の京上りの時をゆりひぐ〳〵宗雄がこころの胸ふ絶ど
ろく〳〵おりひをなやまし〳〵一日侍女等打寄ゆが慰種ふて爛漫ら
花の下の小軒子ふ姫をうしろ十種香貝合などさまぐの遊ひ〳〵居ら
折〳〵ふ手詞の猫櫻の枝ふ蝶の花をうつけ築牆ふかけのびりう〳〵蝶ふ
くらひけるぶくひふしそびくるうけ紐とけ〳〵花の枝ふかくて猫ちめとろ
所ふ花飯りぬ爰ふ又三木之助伴宗雄ハ父の召仕ふ悪妾の讒言ふりて

其ゆ露どうも罪なとのいくも父希雄の勘當をうり播磨を去りて當國ふ
流沈けるが此四五日前當所ふ移り此下館の築牆一重ゆへぶ〳〵たる空屋を
りくめく住め彼生得閑雅ふ〳〵常ふ書を讀〳〵を好こ詩歌を吟
琴を撫〳〵樂こ〳〵ろ〳〵一日外の方ふいで〳〵鬱悶をなぐさめるふ
築牆ゆ越〳〵此方へさいでる花の枝ふ物ゆり風ふつまく〳〵今〳〵ひらさぬ
宗雄竹の竿をうり打落〳〵ふるふ金銀の鈴をつける錦のくの紐るり
こハ此隣屋敷の飼猫の頸綜をくめとひくりうどちうるがめき笑えるん塀
越ふそハこうこの物ふうんべり出〳〵ゆ面ゆ目てのふ宗雄うれなり櫻をとり
く塀ふのびりかの紐をなげつけびるる人今てりのいくるい傷ひめの侍女のり此
時宗雄と採ひめ顔うん恥めまうふ扨りひかけざるゆるなこバ互ゆこ夢る
うつくこと胸そろうそどうゆり姫ハうるさそとぶりさそ赤くあり

く仕とのふべれどこのもは宗雄はかねてい宇治川わくまもなくえられ上臈ふ
疑ふ〜ここへ鷲尾の息女ふくめりとはじめて知るべ卒ふよりめも
ひらく〜梯を下りく裏ふいりぬ姫ハ遊び業も手ふつるど理心もるげ
おくさまがら酔人のごとしおもふ宗雄おりひうけど隣ふ家をのとめハ
まつく〜宿縁の深さあて縁ばハ千里をへだてるとも逢易縁るけるば面
紙對さられども見ること難とふ常言のたぐひなるべ〜わ〜て梯ひめハ
のめまりふ〜ぶ〜さ紙ちのび侍女等ふ仏のうち紙語ふしけるば侍女ども
一計を生ず姫ふ文かゝせ紙鳶ふ四ひつけく空ふのび糸をさそちくこゝろ
ひるこ風ふつれく宗雄が書を讀窓のもふおちぬ宗雄これをひろひとりて
文をゆるれるふ紅梅檀紙をゆ重く日来のかゝることゝおりひをこま
ゆふのべられ筆のゝびも拙ゝど宗雄もおほせりひふのくれ君る

折なるばいとゞ〜〜返書をかきく又紙鳶ふ四ひつけ風のかゝれを
まちく空ふのびけるば隣ふハ侍女等ふくこれをうけつけ翠簾の鉤
をなげて紙鳶の糸ふりゝこ返書をとりて姫ふ付させるる手おそ〜〜
ゆゝれるふ其情我と露だうもこゝのわばうもく〜さふこゝどこれろ
病の氣もいづくへかゆきて度くかゝわせ文をとり見て逢見をとり紙とり
ぬさく一時宗雄が文の結末ふ一篇の詩あり

翩々雙蛺蝶　時入苑中花
相見撫琴坐　西隣是卓家

櫻姫も文のわくふ一首の歌をかきくつゝりく〜
めうどとられ梢の花〜中垣のそゝとふち〜と風もふゝるむ
さて侍女どもとりく一夜宗雄をものばせるり宗雄庭ぐゝひふ来り

月明に乗じて四方を顧るに庭の中に植並べる櫻花は錦の帷をひたし
たる木の間々の躑躅は紅の艶を奪へる似て松に掛る藤
波は風に靡き靡き琉璃の瓔珞を垂るるに池の底に茶靡へ
露に輝く琥珀の連珠を貫さるに異なる假山の辺にまひやり
水の面に一つ二つ雅なる鴛鴦は閨房の光景を覗ふ軒端に玉なす
かざらさる鶯の籠を掛る窓の下に書案をもうけ紫の錦を
敷て綉の地に蒔る硯箱を置て手ずさみに反故を
ひろひつ傍に螺鈿の厨子あり
これは櫛の箱打乱の箱香具の箱など諸の調度なに取取所なれべ
絶架に色々の綉纈纈今様色のたもとの小袖どもなに取具しく
ひろげ文車に世に希なる草紙どもなつめ壁に定家家隆を
ちらめて當時名高き歌人の色紙をおしうつしたる琵琶和琴
笛のたぐひをなべてのものなる艶に微妙なる黒方侍徒のたぐひ
に非ざるものなしうちくひとへに人間のうちとは思はれず仙窟に
なりとうらやまれべきふぐ富貴の光景なると且心中に思ひ
櫻ひめ立出て宗雄を几帳のもとに召いざなひ侍女等美酒嘉殽
をさしすすめて進め姫はおりひめせまりて病に臥る日来の出情を
語るに涙に袖をぬらせば宗雄は父の勘當をうけて當國に
おりひらのごと隣家に移られて新語奇遇のうれしなに恥ひろ姫
いとく此ごのかたせ文をとりてべるに君は風雅詩詠をよくし
手跡も古人にくらべ玉のごと妾も又愚なる歌よくし繪かくことに好ふ
なにぞ都にもあるべき物語繪とせまくせんとて取出さんと

櫻姫病を保養のゝめ
下舘ふ移り伴宗雄父の
勘氣をうけゝ丹波ふ
さゝへの舘の隣家ふ
住ゝ

櫻姫ふ遇

しむ宗雄これをみるふ小野小町が一期盛衰の事を圖しる繪ふて神
彩飛動誠ふ絶筆なり繪詞をこゝに
富をみ容ハ三千の美ふまさるとのへども若しく双親兄弟を失ひ老
く子孫親戚は紅顔も垢面と変じ玉躰も痩身となりつゝふ丐嫗と
なりて路頭ふ臥おのふ古より世ふをぐれる佳人よく終身の栄花を
保者まれなり昭君色三千公奪ども塞外の塵を免ることあたハず
楊妃寵一國ふ隆けれども馬嵬の死を逃がれ造物の盈ちを忌都皆かく
の如彩雲ハ散ぬ花ハ砕ぬ理いかんともなしがたし
て嘆息しけれども猶ひめこれを安のこまんぐく人の盛衰ハいつ誰身ふ
のがれもとべくもなど妄ごとき也豈のとゝふとゝまゝさどかりハ思ひ
ふこ世の中なりとゝ涙さしぐくなる侍女等ハ両人がうなる物語ふ

時をなりさふ公めぐらしく姫の耳ふ
宗雄が手をとゞさて鴛鴦衾ふいりあさく両人ハ希なる契ふ春の夜
のあけ世をこゝろうぐるのく曉を告れ雞の声ふ夢をやぶり花
をるめるふ打驚く宗雄起上り又のあゝせ契くまりのでんとを
桜ひめ袂をひゝ今更ふ恋ひをまもめ昔ぞ思ふめひく
袖をもぐりけるとゞ宗雄も打ちわ出ろ出ぬ
折くものびめこと おとゝ二月どろふ おとびめ侍女等の外ハ
ふ人さゝふなりなり

東鑑を案ふ。實朝公度く繪合の儀あり。奥州十二年合戦の繪。小野小町が
一期盛衰の圖。吾朝四大師の傳の繪あゞ。殊更愛玉ひしはこれ承元中のこと
なり。本文の時と同代なり。此頃ハもゞで。物語繪のおこなはれる世とおぼし。
又案ふ。建保職人哥合の繪も。實朝公なゞの好ませるまてるりの手

第十一　夜襲第勝岡亡義治

かくて一日播州より伴の家人狛野丹作といふ者轎子につくせる宗雄
ゲ住家を尋来り此度君の御勘氣ゆりぬふよりまもひのさめまうり
越めとく御既國めるべくこと父希雄ゲ自筆の免状を与へ宗雄
かーいつでくこれ父讃ふ悪妾の讒言ふよりく汝濡衣の罪を得さ
支分明さるふより此度妾父罪ー汝をゆると其實否をたゞさどて
勘當せーい我誤ありこく既郷いくとべーこかさうり宗雄讃をつり一頭
ふい勘氣のゆりーる父ちびとのども一頭ふい按ひめふ別んこ父悲こかくこと
ちりせば其心支度もきべきものをと權思案よりれこりくゲ私の愛情
ひれく遅滞せんい不孝のいこりありと心父轉ゲく奥の間ふ入り
一封の文をちくめ文鎮ふこりうけく墻越ふ隣の庭中ふ投入家財

を四五箇の擔子ふつくし旅衣を著こく用意の乗物ふ乗移れば丹作
下部ふ下知ーこれを守護ーく急去りさく其日の夕つさ姫の侍女
かの文をえつのく姫ふえせーめけこば姫へつのかふせ文とゆりひつ
ゆくれこふ俄ふ既國のはゆちるこれべば父讃より胸つぶれく悲さふ
堪ぎ文を顔ふ扣ーたてこで立ふーけるこれより上館ふ既くく又病の床ふ臥
けるば義治夫婦再驚ル日夜心父いさあくり妻ふ又姫の守り女山吹ち
さこれ頃父佐伯平除二郎まりけるふより私宅ふ扣り居く喪ふこりう
くゞ忌明ーく館ふ上り姫の枕方ふそひく看病けゞ病のさめをいぞり
ひそうふ侍女等父責く問けるふちりくの夏めしこと語けるば果ーて我
推量ふくぶつとこ野分の方ふそのはゆ告れ野分の方義治ふ語り彼が
望をとゞさせ玉で病もおのづく怠るべ伝るも命ふかへくこくえど

伴善雄紀名虎相撰ノ事文德實錄ヲ始メテ正史ニ見ズ

やとおぞ義治も其意ふかくひとをくゝ宗雄が家系及び為人と
聞めけるに其先祖は人皇五十五代文德天皇の御宇卑賤より
出くゝ高官ふのがりくゝる伴大納言善男宇治拾遺の末孫にくゝ父は播州
宍粟の郡士伴希雄とくゝ頗權勢あり宗雄は美貌秀才相兼て武藝
文字ふ通じ詩歌管絃のたぐひにあらぬ業までもよくこれを曉
めと語くれば義治大ふ悅び我婿とそころふ不足なくこゝ急ぎ媒人を
たのみくゝ播磨ふつゝそのよをとひのもとくれふ幸宗雄は次男なり
殊ふ鷲尾は當時なびかぬ長者なれば希雄速ふうけひきて已ふ
及ことのひ双方喜ぶる限也姫の病もや怠けるべちうれふ吉日ふ
えらびくゝ宗雄をひへらるべきふきまめるる美ふ又信太平太夫勝岡は
このれ年義治ふ告くゝ聟とうるんこふ望けるふうけがざるうへふ

誹謗せくゝ其後櫻ひめを奪んくゝ田島造酒丞ふ家人を
打ゝ遣恨骨髓ふ徹くゝ義治をとくゝ山林田庄ふ奪
櫻姫を盜取くゝ妻ふせばやと密ふ謀ひ立といへども鷲尾の家中ふ
この勇士あれば容易ふ手ふ出ぬくゝ月日をすくゝ前年
鷲尾の獄舍を越くゝ逃去くゝる強盜蝦蟇丸愛宮の山奥ふかくれ住義治
を打んとうけ祈ふはを密ふ召寄くゝ計を与へ折を窺ふ斯は櫻姫
宗雄と緣ぶかくゝ支をゆくゝ殊更ふくゝ思ふ
事を起んと其支度をぞふけるくゝ蝦蟇丸はこのびの達人なるふ
より一夜鷲尾の館ふ忍ひ義治が寢所の床の下ふかくゝ熟
睡の時を窺床の下より刺殺くゝ首をとり燒草ふ火藥をつくゝて
床の下ふ投入ける時侍寢の武士等出會けるこゝ急ふのぞくて池の中ふ

強盗蝦蟇丸信田
平太夫が討を得て
義治を打平太夫
夜就鳥尾の
第宅を襲
鷲尾一家
滅亡を

飛入水門をくぐりて逃去りぬ火燃上り折しも風烈夜あけ
館中一面の焔となれさへ贍つぶるゝ忽然として貝鐘太鼓の音
もゆたけまぶ唯めきれふめされるぐりうり時ふ信太平太夫勝岡身上
おごそふふまひめまくこの良等を具〻く馬をとゝめ関を哄とつくりく乱
入けまぶ館中の男女めつくふとめたこいうまることをとおめたこけぶ
邑俗四維道ふ異まるぐまりとのべども此館中ふめまくこの勇士めまぐ
箇く得物をこりく向會命をきらふ猛勢をふるひく戦けて平太夫
かゝく野武士山賊のしぐひとかくくひ良等のうちふくらへけまば人數太
かほく驚尾の良等ハ主君を打まて不意を襲まて殊ふ素肌の戦まれば
心ハやまけふ敵りふとのべども防ぐく義ふのこくやる者い主君を打まてく
生まぐへ行の顔めくんとかりふさあふ戦く打死まるもの慮深者ハ權一命

を保後日仇を報べくと一方を斬ぬけくおち行もの信太方の者等も
過半打まふりる野分の方ハかゝく男まさるの婦人めまこば家系の一巻
を懐ふ一の谷合戦の刻こ九郎判官殿義治の父経春ふ賜まる金作の
太刀を家の宝番りくおめ也さるを取出くく腰ふおび馬ふ打乗
長刀を打ふりくく一方を斬ぬけから色く逃出けるぐ才うちふのまこ矢を
うけく朱ふ染り手綱ふくりつく揆ひめいぐくわるひめくくと呼て
けぐ又敵兵追来まるりうこむ四面八方ふ斬まくひ馬も矢疵ふ堪ず嘶
と倒まくれば歩行立ふまり長刀杖ふつたよるめくのこ公ふこまめつ
ゐ櫻姫公尋ふ矢疵やいくくものびがく炎頭上ふふりりゐうち
ふ燃つき誠ふ逃かくまる折しも義治が乳母子の宗我部和五八とふ
者遥ふえつけく馳来て危まる公ふくひ出くく行くり揺ひめい

野分の方敵中をきらぬけく
あまたの矢
疵をおひ
かのほのうち式
かけめぐり〳〵
桜姫をうばひ
身体つれ
うる式
曽我部
和五八
分抱
しく
落
ゆく

山吹
ゆひ
くる
敵
とき
とうひく
桜ひめと
さふ

打まとゝ中我身のいきのうちく何のうひめ〳〵闇路をたどゝんと已、
猛火の裏ふ飛いんこゝうをとを山吹めらゝく抱〳〵めひとまづかちて母君の
御行方をも尋ぬとこゝらへくゝとりあひ出けゝる敵兵えつけく馳来て
姫を奪ゝらんゝを山吹刀ともろ〳〵いどく戦とのへくゝも女のかふかゆうべど
わとゝく危かゝられ所ふ田鳥造酒丞飛が如ふ馳来て焼かゝうそれ関樋と
ゝゝ群敵を打倒けもべ火花さと散く時ふもめ〳〵く螢火のゝ光をつる
如く敵兵此勢ふおかれく逃去けもべ造酒丞山吹ふむひとく姫君ゝ
扶〳〵おちゆきれ我ハ野分の方の御身氣づけもべ今一度敵ふ向ふいりて
尋めべ〳〵く両人をかく〳〵ものゝ身ハめふりゝうゝされバ野分の
方ハ和五八ふとくゝうれておち行桜ひめハ山吹ふ扶られゝ走り互ふもの
ゆくさゝをを知らざりゝ

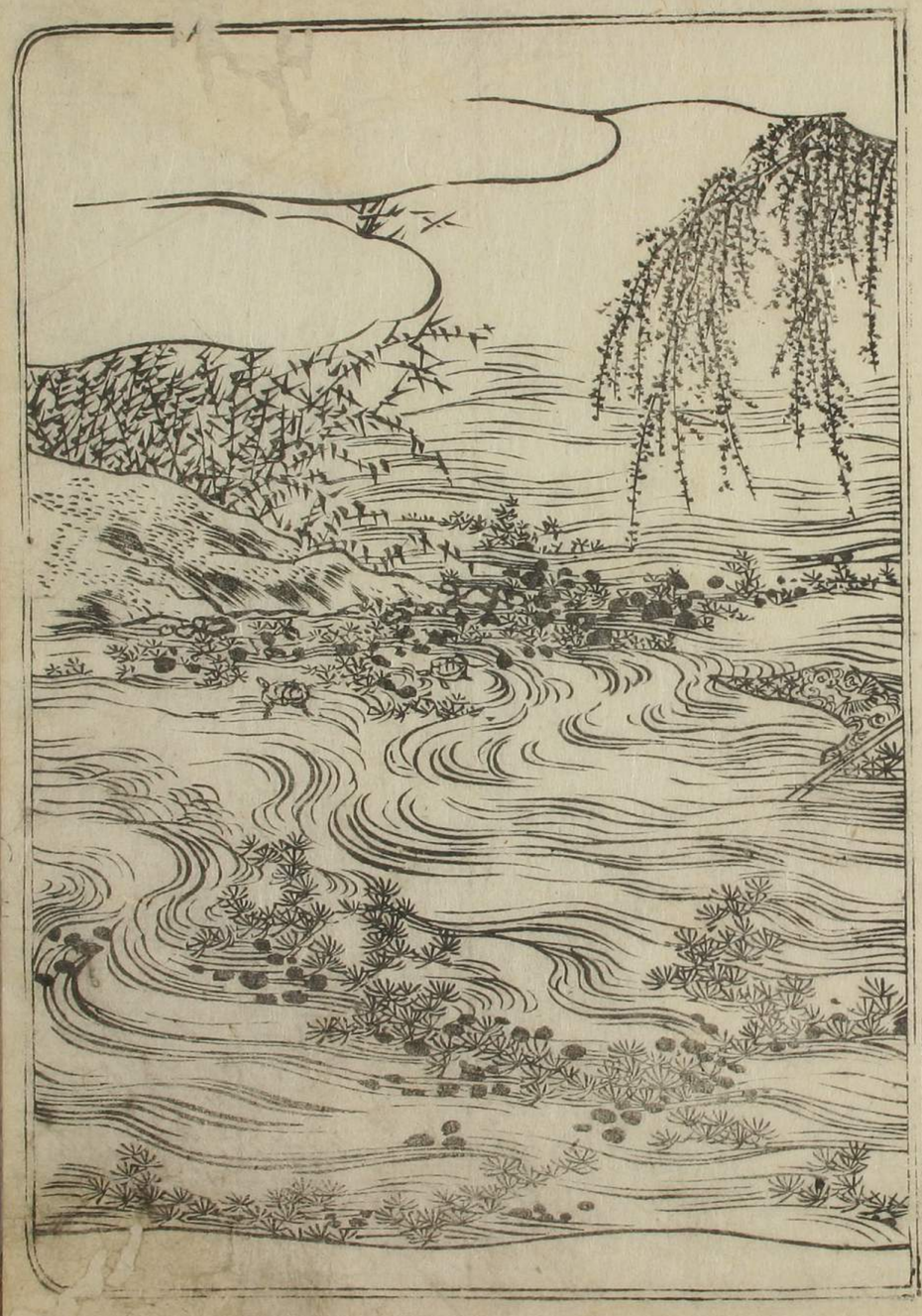
第十二　蝦蟇丸傳帯取池記

さても野分の方ハ生野里和五八ゞ親族の家ふ深くかくゝ居く矢疵を療
治ととゝ三月ゝゝふ平太夫勝岡桜ひめの行方を尋れ
どもれど野分の方ハ手ゝ負ゝれば必定遠くゝ走れば捕〳〵人質とし
ゝ桜ひめゝ手ふいもんゝく尋れゝをゆかの家ふと居ゝく播磨ふ
ゆくゝく宗雄をたのまんゆもかくれ身ふるゝくゝ面目ゝゝやせはかくや
とべゝと思案よくれゝりけるゝ和五八いひくれいづれの道ふも此所ふ長居ゝ
ゝらんハ氣づけもべ小人京都へとりあひまゝ〳〵〳〵良計をゝ御仏
を安化ゝまゝんといふふ仏をさゝめ家系の一巻を忙僕ふつ〳〵く携宝刀ゝ
腰ふおび和五八を具〳〵夜ふまぎれくものび出道をいそぐゝ亀山越の
山路ふさしかゝりける時信田の良等追来りくゝとく捕んゝと野分の子

力をぬいて向會けるべ和五八の母まちちのふるこゝ小人ゝまもしてこゝ
走り走へといさめくゝ母秘術を尽くゝ戦けるゞ敵い多勢なる双拳
四手ゝ敵くゝゞゝつひゝ打ちてゝゝ野分の方へ逃ゝふゝゝゝ
北嵯峨我のめゝうまゞ逃来り咽をうかさんとめゝうの池水を掬ゝ池の
面をうれば色ゝ紅帯一條水上ゝうきぬ玉簾錦茵のうちゝあらせし
身も俄ゝ零落ゝゝ乞まゞいゝゝくゝうるゝや乞中ゝりひるゝ敵多勢
なれば和五八も必定打ちつゝん少のゝゝも彼ゞ身ゝつけさしされば飢ゝ
ゝめゞんてゞゝさへなれ折ゝこの物をうつけゝるゝ天の与へなりひろひ取
く路用ゝうめゞゝこ包をゝゝゝゝゝゝゝゝ帯をゝゝんゝゝゝゝ
忽水中ゝより鉄搭を生ゝゝ水底深くゝゝれぬ是乃蝦蟇丸ゞ仕業なり
爰ゝ蝦蟇丸ゞ仔細を尋ゝゝ過年鷲尾の獄舎を越ゝ逃ゝゝゝゝ權

陸奥ゝめゝゞ其後當國ゝ来ゝ愛宕の山奥なる農家の夫ゝうゝゝゝ
ゝる女の容貌美麗なれゝ心迷ひゝゝゝゝ後の夫となるめ其妻の名ゝ
小萩とゝひちゝゞゝ眼病をワゞゝひゝゝ盲目となるめゝバ蝦蟇丸一向
ゝれゝうゝゝゝめ前の夫の女児二人あり姉ハ十三歳ゝゝ名ゝ松虫とゝ
妹ハ十歳ゝゝ名ゝ鈴虫とゝ二人ゝゝゝゝゝゝゝゝ世ゝゝゝれぬ蝦蟇丸
ハ元来海賊木冠者利元の子ゝゝ父ゝり傳ゝる南蛮奇薬の方ゝり其薬ゝ
耳目鼻口ゝめゝゞ水中ゝあゝゝ見聞言語をなゝゝ陸ゝある人の如
誠ゝ奇方といふべゝゝゝゝゝ蝦蟇丸妻ゝ京の町へ通ゝ物賣といひ
ゝ北嵯峨廣沢のゝゝゝの池の芦間ゝゝゝれ居ゝ池の面ゝ色ゝ紅帯ゝ
うかめゝゝ往来の旅人これを拾取んとする者めゝバ忽水をゝゝて水底
ゝ引ゝゝ縊殺ゝゝ衣服金銀を奪取ゝ年ごろゝりの奇薬ゝ用

蝦蟇丸
蜜方の
奇薬ゑ
彫く
池底ゑ
行人の
衣財
野分の方
帯と拾
取ん
水中ゑ
引入
られ



ずゆゑに水中のくるしみを素自由なり妻小萩は志正者なれども兄
夏を露とくらもちらぞ郷人は池の主帯に化して人をとりこのひがごと
ちづく者也後世に帯取の池といふこれなりとぞ山州名跡志の説と異同わかり
けれに信田平太夫ふたのまたく義治を殺害し宿志成とげしる
うへはまもなく賞金成得て悦び家あるもかつぐぞ妻子成とて其場
もうくらに古郷日向へ趣くく播州室の津より船に乗りけれが
牛窓の海上わく船くらえり水練の達人なるべ一命は惜しといへども
物の賞金を失ひ古郷へゆんもかひなく身の薄命を歎てとぼく家に
立ちどり又物の悪業を改ふりさるれかとに蝦蟇丸野分の方成水中
ふりいれ己に縊殺くくよくくこれバ年はもとく盛をるとしぶ
誠に絶世の美人なるべ儀に心を轉じいそぐ〳〵茂林のうちになとみ

あげ水を吐しめるぐ〳〵分抱しけるバやく人ごろつた蝦蟇丸
をくくあやまりけれが蝦蟇丸のひくくかん身あやまりて池に
つるとと小人幸にもひ伏めん御姿をえやせばたのくくのかん方
ともやがえざれに従者なるくひくり此辺成たどりもに心定
いとれのん小人が住家はこまてり遠くどもなるひまわくせくもど
つるとに中とのせやんいざくもへとのに野分の方は心なくどと いへども
贍ちた婦人なるべ且彼がこゝがにもちくどくくろくどやく胸をさぐめ
くとりうひいざるりれく蝦蟇丸がかくと家にゆきぬ

曙草紙巻之三終